

碁盤の歴史

古作 登 (大阪商業大アミュージュメント産業研究所主任研究員)

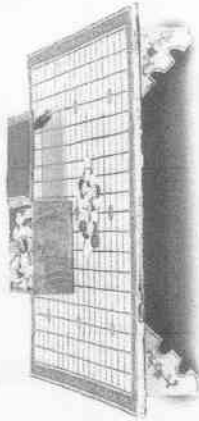
現代の碁盤はほとんどが木製で、櫃(カヤ)やイチョウ、桂、ヒバといった材質が用いられる。一般的には櫃が最高級品とされ、宮崎県産日向櫃の盤は、柾目で厚いものになると数十万から数百万円もする。大きな盤の材料となる木は樹齢数百年、伐採したあととも乾燥に年月がかかるため高価になるのも致し方ない。江戸幕府崩壊後「旧徳川家碁盤所」を名乗った福井勘兵衛が作った名盤も櫃で作られている。

日本でもっとも有名な碁盤、奈良・正倉院に収められている国宝「木面紫檀碁局」(もくがしたんのききょく)は紫檀(唐木とも呼ぶ)が表面の素材である。奈良時代以前、百濟から日本に贈られたとされるこの盤は、まさに美術品といってよく、盤面は黒漆が塗られ、盤側には金、銀、象牙などを用い、ラクダ、草花、鳥などの装飾、19×19の線には象牙が埋め込まれている。

さらに時代をさかのぼって最古期の中国で発掘された漢代(紀元前3世紀～3世紀)の盤は17路の石製や陶製であった。

盤の厚さも時代とともに変化してきた。碁用具に関する日本最

古の史料、平安時代の「碁碁式」に記された碁盤の高さは3寸4分。江戸時代の家元、三世本因坊道悦は3寸9分と定め、その後は徐々にサイズがアップし現在には6～7寸が高級品の標準となった。



古代中国スタイルの陶製碁盤

第5回

琉球の囲碁

古作 登 (大阪商業大アミュージュメント産業研究所主任研究員)

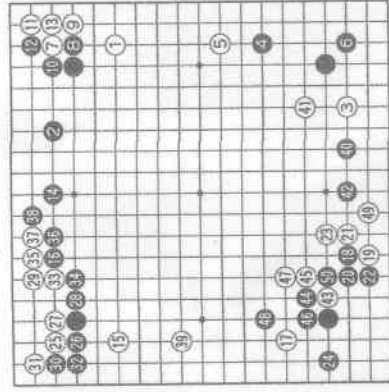
囲碁は古くから国際交流のツールとして重んじられた。日本の正史『日本三代実録』には(最澄や空海も参加した)804(延暦23)年の遣唐使一行に、碁の名手として伴宿禰少勝雄(とものすくねおかつお)が同行したことが記されている。

沖繩は15世紀中頃から江戸時代まで琉球国という王国で、日本や中国と貿易などを通じ交流し独特の文化を持っていた。琉球最古の地誌『琉球国由来記』(1713年国王に上覧)には囲碁、象棋(中国将棋)、相碁(日本将棋)が代表的盤上遊戯として載っている。

なかでも囲碁は知的階級のたしなみとして重んじられ、日本の家元と対局するほどの実力者が輩出した。琉球国の名手の対局で最も有名なのが薩摩藩島津家を介し江戸で打たれた1682(天和2)年の親雲上浜比賀(ペーちゃんまひか)と本因坊道策の二番だろう。親雲上は士族の称号で、浜比賀は古武道の名手でもあったようだ。

手合は四子、1局目は白の道策が華麗に打ち回し13目勝ち。2局目は黒の浜比賀が手堅く打って2目勝ちと打ち分け。浜比賀は上手(じょうず=七段)に二子の実力(三段)を認められた。

図は2局目の布石から。石の効率は重視する道策は白19や43などツケを巧みに用いてサバキを図るが本局の黒は落ち着いていた。国に戻った浜比賀は道策の石運びを伝えて琉球の囲碁を盛んにした。



本因坊道策と親雲上浜比賀の四子局(1～50)、243手で黒2目勝ち